

日本脳神経外科学会に医学生が登壇

社団法人日本脳神経外科学会の第70回学術総会が10月12日(水)～14日(金)の3日間、パシフィコ横浜で行われた。今回のテーマは「脳科学に基づいた脳神経外科医の研究と診療の検証と未来」。国立がん研究センター理事長・中央病院長の嘉山孝正医師が学会長を務めた。

この学会2日目の13日(木)、特別企画として医学生が発表する場が与えられた。演題は「医学生から見た脳神経外科とキャリアパス」で、発表を行ったのは「医師のキャリアパスを考える医学生の会(以下、医学生の会)」の代表である防衛医科大学校医学科4年生の戌亥章平さんである。学会長の嘉山医師から直接依頼があり、今回発表する機会を得られたのだが、本レポートでは戌亥さんが当日発表した内容を紹介する。

今回戌亥さんは発表するにあたり、まず医学生の会ホームページ上で脳神経外科に関するアンケートを実施した。回答総数は137名、うち医学生117名、初期研修医3名、医師17名という内訳。このアンケート結果を基に、脳神経外科のキャリアパスについて自らの意見を述べていった。まず図1の「脳神経外科医になりたいですか?」という質問に対して、約40%の医学生が脳神経外科医に興味がある、または選択肢の一つとして考えているという結果となっており、また図2をみてみると、脳神経外科医は「高度な外科治療」というイメージが圧倒的に強いようだ。しかし実際の脳神経外科は外科的治療だけではなく、ガンマナイフに代表される定位放射線治療のほ

か、化学療法や周術期管理、術後のリハビリでも重要な役割を担っている。戌亥さんはこの点について話し、医学生のイメージは顕微鏡手術や救急対応といった従来の狭義の脳神経外科に偏っていると指摘した。さらに医学の発展によってこれら非外科的治療が進歩するに伴い、外科的治療の脳神経外科領域における役割が相対的に低下し、また高齢化などによる疾病構造、社会環境の変化がこれを後押しすることになるという。戌亥さんは「医学生のもつイメージと、現実の脳神経外科医の領域、そして将来において求められる脳神経外科医像との乖離を解消することが必要です」と語った。

では、脳神経外科医を増やすためにはどうすればいいのか。戌亥さんは次の3つの解決策を提示した。

① 学問的な魅力を伝える

先にも述べたが、図1のアンケートで約40%の方が脳神経外科に興味をもっていることが分かった。しかし、この40%がそのまま脳神経外科に進むことはあり得ない。この興味・関心をどこまで深めることができるのか、ここがポイントとなる。

戌亥さんはこの解決策として外科医のセミナー開催や、各大学における教育の充実を挙げた。実際に戌亥さん自身外科志望ということもあり、10月8日(土)に新宿・京王プラザホテルで行われた「日本から外科医がいなくなることを憂う会」主催のセミナーに参加し、ますます外科医になることを強く思ったという。さらに教育制度の一つの例として、



▲壇上で発表を行う戌亥さん

福井大学の教育システムを紹介。福井大学のカリキュラムでは、医学部3年次の夏休み前の3週間、各講座に学生が配属される制度があり、その中で脳神経外科では毎年3名の学生を受け入れている。この講座では腫瘍の遺伝子解析などの研究課題や、術中生理学モニター解析のトレーニング課題が与えられるそうだ。そして5・6年次では卒前病棟実習としてシリコンチューブを用いたミクロやマクロでの縫合練習に加えて、実際の手術の現場で頭蓋骨プレート閉鎖を行うなど、医療法上問題のない手術を経験することができるという。

このような福井大学のカリキュラムはその科の領域を深く学ぶことと、自らのキャリアの形成を思い描く上で大きな指針になるだろう。実際にこのプログラムから、脳神経外科を選択する学生も出ているようだ。

② キャリア形成のサポート

次に図3のグラフをみてもらいたい。このグラフは図1を男女別に集計している。このアンケート結果をみると、男女差がほとんどなく、多くの女子学生が脳神経外科に魅力を感じていることが分かる。戌亥さんは「脳神経外科医の役割が多様化し、手術以外の治療法が発達することが予想される中、女性をリクルートすることが重要。そして今後女性の入局者が増えたときに、女性が継続して働けるような環境が必要です」といい、女性医師の復職支援やe-learningによる専門医の更新制度などのキャリア

支援策の必要性を挙げた。

また先の図1のアンケートで医学生が脳神経外科を選択しない理由として、「技術獲得に時間がかかる」「拘束時間が長い」などが多く挙げられており、それに対しては「研修期間の短縮や多様なキャリアを示し、それを実際に支援することが必要」という意見を提示した。

③ 労働環境の改善

「日本の脳神経外科医は研修期間が非常に長く、一人前になってからも常に長時間労働、訴訟のリスクにさらされます。リスクに対するリターンが見合いません」「入学前からあこがれの診療科でしたが、入学後、大学の先生方の疲弊しきっている姿をみて選択肢から消えました」。これらは今回のアンケートで多くの医学生から寄せられた声。いずれもネガティブな意見であり、これは脳神経外科に限らないことだが、学生の立場からも労働環境の改善が求められているのだろう。

最後に戌亥さんは次の言葉で今回の発表を締めくくった。「多くの学生が脳神経外科に魅力を感じています。多くの学生が脳神経外科医になることを諦めずに、夢を抱きながら活躍できる、そんな未来であってほしいと思います」。

医学生の立場から、このような大きな舞台上で自らの意見を発表する意義は大きいのではないだろうか。学外に飛び出し、仲間と意見交換し、自分のキャリアについて真剣に悩み、さらにどうすれば日本の医療がよくなるのかを考える。そしてこの思いが10年後に大きな実を結ぶことになるかもしれない。いずれにしても今回発表を行った戌亥さんに大きなエールを贈りたい。

図1

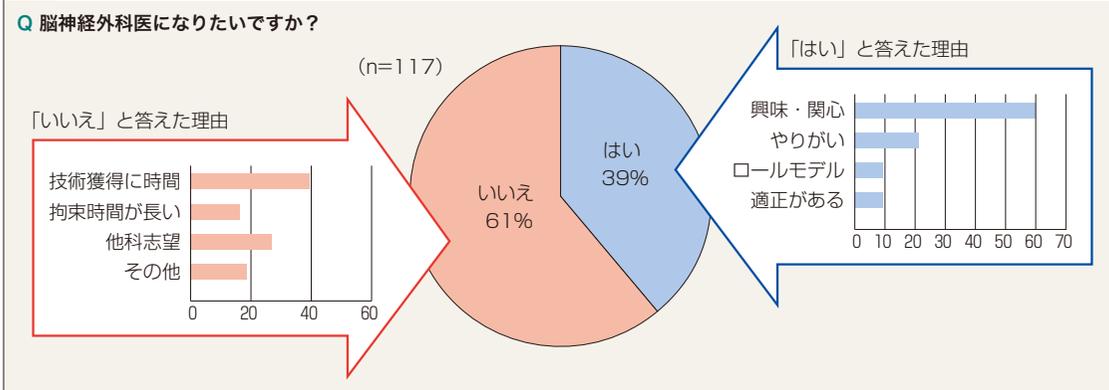


図2

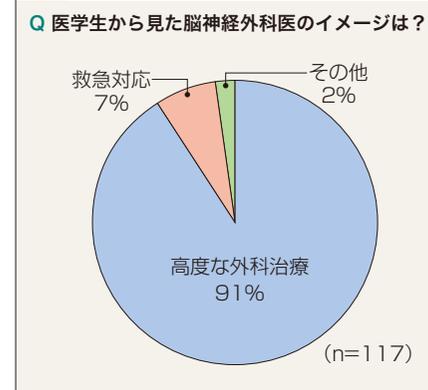
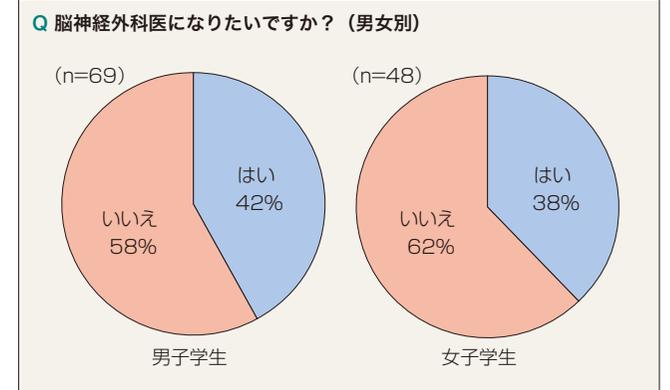


図3



*図1～3は戌亥さんが発表の際に使用したスライド(誌面の都合上、一部変更して掲載)